

## 佳作

### 最高の記憶

青森県青森市立甲田中学校

3年 福士 奏都

私は小さい頃から、ピアノを習ってきた。記憶は鮮明に残っていないが、初めての習い事で、いつも試行錯誤していた。じっくりと時間をかける習い事で、日に日に上達する実感はあまりなかった。だが、音楽に触れるうちに、音楽に興味をもつようになった。歌を上手に歌えた時、音楽を好きになった。そして、ピアノで短い曲を弾けるようになった時、音楽がおもしろいと感じた。最初はただの感覚だった。しかし、学年が上がるたびに、より難しい曲が弾けるようになるたびに、だんだんはっきりと実感していった。いつもピアノと一緒に、音楽が自分を癒やしてくれた。練習は難しくなっても、曲を完成させるのが楽しみで、何度も練習をするようになった。時間を忘れるぐらい、没頭できる。ピアノは、音楽は、私にとってかけがえのないものとなった。

中学2年生の春、学校の音楽の先生から、合唱団で歌う合唱の伴奏を、1曲やってみないかと誘われた。少し不安もあったが、中学1年生の時の文化祭での合唱コンクールの伴奏経験があったことと、合唱の伴奏に興味があったことで、すぐに「やりたい」と感じた。少し難しい曲で、音や指づかいに苦戦したが、それらを覚えてからの、強弱やバランスなどの練習では、急に仕上がっていくため、やりがいがあった楽しかった。

練習して仕上げた伴奏を、合唱団の合唱を初めて合わせた日は、先輩もたくさんいたため、緊張した。しかし、いつも伴奏だけで聴いていた曲が、合唱が入ることでとても美しくなり、この曲がようやく完成したような感覚で、とても興奮した。そして、さらに練習を重ね、本番を迎えた。大きなホールで、舞台のわきでスタンバイをしている時、緊張で震えが止まらなかった。そして、頭が真っ白になりそうな中、いつもの練習通りに弾いた。体で感じるほど、歌声とピアノの音がホールいっぱい響いた。鼓動が高鳴り、緊張と興奮が混ざった感覚が、体からあふれる。ステージのまぶしい光に照らされた、指揮者、楽譜、ピアノの鍵盤が、脳にこびりつくように目に映る。息を吸っているのに、脳に酸素が届かない。頭が真っ白になりそうだけれど、とても気持ちがいい。曲はもうクライマックスを過ぎ、曲の最後を迎えていた。最後の音の響きをめいっぱい感じながら、鍵盤から指をそっと離れた。そしていすから立ち、薄暗い観客席を向き、指揮者に合わせてお辞儀をした。

その後はずっと、合唱の余韻に浸っていた。とても清々しくて、最高の気分

だった。自分はどちらかというと内気で、あまり人前が得意ではない。発表も、とても怖かった。でも、とても気持ちがいい。注目されることが気持ちいいわけではない。あの広い空間を音楽で響かせるあの感覚が、とても気持ちがいい。

あの日の経験が、私のピアノへの、音楽への努力の力となって、今も支えてくれている。もっとピアノが上手になりたい。もっといろいろな曲に出会いたい。そして、もっと音楽の世界を深めたい。どれだけつらくても、どれだけ厳しくても、絶対に、諦めたくない。私は音楽が大好きだから。音楽がついてきてくれるから。